

南スマトラ、コムリン川流域の稲作景観

高 谷 好 一*

Agricultural Landscape in the Komering River Basin, South Sumatra

Yoshikazu TAKAYA*

ま え が き

この特集における私の役割りは、コムリン (Komering) 川流域の土地利用を自然環境との関係において記述することである。自然の面からみても、社会の面からみても、この流域は少なくとも3地区に分けることが可能である。それらは、それぞれ上流山地、中流域、海岸低地としている。3地区での土地利用はもちろん多岐にわたっているが、とりあえず、

ここでは議論を稲作にしぼる。それは、この熱帯雨林にあっても、生活の基本はその主要部の稲作で把握可能と考えるからである。ただ、稲作といっても数十年前までは焼畑が中心であった。ここでは、したがって、焼畑陸稲から水稻への変化を中心にこの地域の土地利用を描写し、できることならその変化の原因をもさぐるとういうものである。

I 上 流 山 地

I-i 火山湖周辺

スミノン山 (Gunung Semabung) の頂はほとんどいつも雲に覆われている。おそらくそこは、もうモス・フォレストに属しているのであろう。その直下には、まだ処女林と思われる濃い緑の森林が残されている。この高さは、もう少し北のラハット (Lahat) あたりでは茶栽培の拡がっている所だ。しかし、ここには茶はない。垂れ下がった雲の下に残されたこの処女林は、せいぜい高度差で 100 mほ

どである。それより下は湖面近くまでの約400 mにわたっては大きな木は全くない。藪か草原のようなものが濃淡の縞を作っている。ここがラナウ (Ranau) 農業の核心部であり、コーヒーや丁字やタバコ、ピーナツ、みかんなどの畑になっている。1915年に中部ジャワから導入されたタバコはスミノン山の特殊な火山灰に極めてよく適合して、一躍、ラナウの最重要産物にのし上がってしまったといわれている。これに次ぐ主産物はコーヒーだが、最近では丁字が急速にその面積を拡げている。湖ぎりぎりの火山裾部には、こんもりと茂った樹々の帯が続く。バナナ、パパイヤ、

* 京都大学東南アジア研究センター； The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

マンゴーなど，自家用の果樹の混ざった屋敷林である。

晴れた日のラナウ湖は極めて明るい。澄みきった水の上をアウトリッガーをつけた丸木舟が滑ってゆく。その軽快さは南太平洋の島島を連想させる。私はこの火山湖を眺めながら，何度か太平洋の島にいるような錯覚に陥ったのを覚えている。一方，雨の日のラナウ湖は，一転して極めてみじめなものになってしまう。霧がかかり，肌寒くなる。何よりもいけないのは，あらゆる溪流が小砂利を多量に混ぜた濁流になってしまうことだ。溪流から引いた用水溜めは，降雨後30分もすると泥溜めになってしまう。

ラナウの水田は，コーヒーなどに比べると，その占める比率は極めて小さい。どの部落にも水田があるというわけでもない。湖に注ぎ入る溪流が時に小さな平坦面を作るが，水田はそうした所にまれにみられる。スカラミ (Sukarami) はそうした水田を持つ部落の一つである。以下はこの部落の1老人から聞いた話である。

- ㊦ 現在スカラミには50戸の家があり，10 haの水田がある。60年前には，30～40戸ぐらいしかなかったが，その時すでに10 haの水田は開田されていた。したがって，最近，水田は細分化の傾向が強くなっている。
- ㊧ 自分の持ち田は60年前に開田したが，開田は森林を焼いて行なった。2カ年間だけ陸稲を作り，3年目より水田とし，以後ずっと水田で現在に至っている。
- ㊨ 自分の田は斜面脚部にあり，湧き水の直下にあっているから水の調節は可能である。一般にこの部落の田は，例えば隣村のジェバラ (Jepara) の田に比べると難排水で泥深い。こうした湿田をサワ・ルバック (sawah lebak) と呼んでいる。
- ㊩ 稲作作業は以下の通りである。10月中ごろから雨が来ると，早い所では苗代作り

を始める。ふつうは11月になってから始める。苗代は本田の一部をよく耕して，そこにバラ播きする。苗代期間は約40日間。

㊪ 苗代準備後すぐに本田準備を行う。鋤は用いない。クワで荒起こしをする。時に2頭立ての牛または水牛にギリンガン (gilingan) という，直径20 cm，長さ80 cmぐらいのツメの埋め込んだ木製のコロバシヤを曳かせることがある。こうした作業をングンダック (ngundak) という。まれにギリンガンを曳かせず牛だけ歩かせることもあるが，これもングンダックという。特別に泥深い田には水牛も入らないので，ひとが入り，手で草をとり足で踏み入れる。

㊫ 植え付けは指で行う。植え付け棒の類は用いない。移植は1回のみである。

㊬ 植え付け後，除草を1回行う。除草には手も用いるが，主として足で泥中に踏み入れる。

㊭ 稲作にとって最大の敵はネズミと野猪だ。しかし，最近はウェルン (wereng, *Nilaparvata lugens*) という害虫が発生して，その被害が絶大である。

㊮ 刈り取りは6月。グタス (getas) と呼ぶ爪鎌で行う。

老人のいう10 haのサワ・ルバックは幅80 mぐらいの谷地田を連ねていて，400～500m続いたのち，湖に出ている。そして，インタビューを行なった9月末には，すでにその大部分がすっかりぬかるんでいた。老人のいったジェバラの乾田なるものは，しかし，同じころまだ村人がその上でサッカーを楽しんでいた。こうした乾田はサワ・プマタン (sawah pematang) と呼ばれ，段丘の上などにあるのである。

I-ii 段丘上の灌漑田

ラナウ湖の湖岸には水田は少ない。むしろ，水田はそれより南のランポン (Lampung) 州

に入ると多い。そこはいわゆるサワ・プマタン地帯であり灌漑水田地帯である。北でもタンジョンブサル (Tanjung Besar) まで来るとまとまったものがある。タンジョンブサルのものは、このスマトラ背陵中の流漑田では最も典型的なものの一つである。

バンドルアグン (Bandar Agung) の集落からは、ラナウ湖からの唯一の流出河川であるクアラ川 (Wai Kuala) が激しく湖の水を流し出している。これが実はコムリン川の最上流部に当たる所だ。クアラ川の深い溪谷は完全なジャングルで覆われているが、その中にもコーヒーの植えられている所が多い。この溪谷ぞいの山道をバンドルアグンから北西に進むこと 22.5 km で、突然小さな盆地に出る。そこには、約 100 戸の家が、しっかりくつき合った塊村がある。これがタンジョンブサルであり、その周辺がかなり広い水田地帯である。

タンジョンブサルは、より正確には、コムリン川の 1 支流が作った小さい山間盆地である。支流は幅 15m であるが、その両岸に段丘がくっついている。西側の段丘は川底より約 20m の高さを持ち、幅 800m に及んでいる。東側のそれはやや低く、高さ 10m、約 100m 幅である。この二つの段丘面がタンジョンブサルなど三つのドゥスン (dusun) が持つ約 300 ha の水田地帯である。段丘を東西で画する山の斜面は全面ジャングルで覆われ、その中にはコーヒー、バナナ、それに一部豆畑が混じっている。

タンジョンブサルはラナウ湖周辺の村と違って母系制のスムンド (Semendo) 族の村である。しかし、水田耕作の基本はラナウの場合と異ならない。11月から12月にかけて苗代を作り、30~45日の苗を2~3本ずつ指で植えてゆく。活着後に一度除草を行い、収穫は爪鎌で行う。稲作の問題点はやはり、野猪とネズミと鳥だ。たった一つの違った点とい

えば、まとまった灌漑施設である。300 ha という水田群がいくつかの水利設備のもとにまとめ上げられている。私達がみた井堰は田頭から例の支流を約 500m さかのぼった所にあった。屈曲した川が岩壁の凹面を削り込んでいる所から、岩をうち抜いたような形で幅 1.5 m の水路がこしらえてある。そして、ちょうどそこに水が乗るように、川幅いっぱいわたって川を斜めに横切る堰が築いてある。非灌漑期の 9 月には直径 30~50 cm の玉石が 40 cm 高さぐらいに積み上げられているにすぎないが、11月に入るとこのとり入れ口から取水する百姓が総出で井立てをする。この作業に欠席することは許されない。こうして水路に乗せられた水は、そこから崖際を這って、20m の高さの水田まで持ち上げられる。一旦、水田に乗ってしまうと、あとは田越しに配水されてゆく。川水はかならずしも通年豊富とはいえないのと、飯米確保には 1 作で十分事足りることから、二期作は全く行われていない。

クリオ (krio, 部落長) によると、ここは地形が平坦だから牛耕を多用するという。このドゥスンには水牛はいないので牛がバジャック (bajak) と呼ぶすきを曳く。時に人間が曳くこともあるという。しかし、クリオの主張にもかかわらず、牛の数を聞いてみると、120 戸の農家に対して、30 数頭しかいない。やはり、チャンコール (chankol, 鋤) が主体を占めるようである。

タンジョンブサルにみられる井堰灌漑とバジャックの多用はここだけのことではなく、いわゆるサワ・プマタンでは普通のことのようである。しかし、こうした小谷ぞいの段丘田は小谷が山深く入れば入るほど傾斜を増し、全体が棚田のようになってくる。例えば、同じ谷をさらに 30 km 西北行してアラマンタイ (Aramantai) まで来ると、棚田からは田越しの灌漑水が滝のように落ち、あちこちに

水車小屋がみられるようになる。棚田の中に建てられた米倉の群といい、全体の様相は、すでにミナンカバウ (Minangkabau) のそれに酷似してくる。一方、ラナウ湖より南へ、ランポン州に入っても景観は同じである。例えば、ランポン州最北の村、パガルデワ (Pagar Dewa) 付近には、見事な灌漑田が発達する。ここでは、二つのドゥスンに属する700戸がとり入れ口を共有する一つの井郷を形成している。この井堰はもっかコンクリートに模様替え中だが、そこから伸びる水路は、やはり典型的な山間盆地の灌漑田風景を呈している。上流山地の水の得られる所は、こうして今日では、灌漑農業が一つの極相に達した安定さで経営されているかにみえる。

I-iii 山腹の土地利用

上流山地の中で水稲作がみられるのは、しかし、全体からみれば極めてかぎられた部分にしかすぎない。大部分は山腹の木の世界として残っている。

パレンバンからラナウ湖に通ずる道を走る時、シンパンマルタプラ (Simpang Martapura) を過ぎると、コムリン川はそれまでの台地と丘陵をはなれて山に入ってゆく。こうなると、時折り現れる道脇の崖には、暗いチョコレート色の土が、キラキラ光る微細な物を混ぜて現れ出す。ガラス片に富んだ火山灰土壌である。これはそれまでの明るい赤色の台地の土とは全く違った、いかにもしっとりとして肥沃そうな土だ。樹々の緑は明らかに一段と濃くなる。これが上流山地山腹の土壌である。シンパンマルタプラからほんの3km来た所で、私達はコムリン川にそった斜面で働く夫婦に出くわした。斜面はそれほど高くない。川からせいぜい50mぐらいの高度差しかないが、その全面は放棄されたようなゴム林で覆われている。その中に200m幅ほどで、木の切り倒された所が頂部まで続いている。

ここが今夫婦の作業をしている畑である。以下は、この男の方から聞いた話である。

㊦ 自分はコムリン人だが、今、ゴム園を切り倒してコーヒー園に変える作業をしている。これだけの所(約0.5ha)のゴムを切り倒すのに10日間かかった。しばらく放置しておいて燃やしにかかったが、なかなか燃えない。だから太い幹はそのままにして朽ちるにまかせている。

㊧ 今日(1978年9月29日)、掘り棒で孔をあけて、米とトーモロコシを混播する。同時にバナナもその間に植える。

㊨ 今から5カ月すると米が刈り取れる。すると、その直後にコーヒーを植える。この時いっしょに陰を作る木を植えるが、これはまだ小さくて十分な陰は作らない。(木は *Albizzia falcata*) しかし、半年経ったバナナはすでにかなり大きくなっていて、少しは、コーヒーの覆いの役目を果たす。

㊩ 来年の今ごろ、もしバナナやコーヒーの間にまだ隙間が多ければ、そこにまた米を点播する。

㊪ 自分はここに3筆持っているが、それは2年前に開いた所(約0.5ha)と去年開いた所(同じく約0.5ha)、それに今開いている所からなる。コーヒーは植えて3年経つと、はじめて収穫が可能になる。それから20年か25年くらいは毎年とれる。20年後木が古くなると、それを切り倒せば、傍芽が出てきてまたとれるようになる。

彼が初年度に開いたという所は、すでに *Albizzia* とバナナが同じくらい優勢になっていて、コーヒーも人の背を越すほどに成長している。

この若夫婦の例は決して特殊な例ではない。他の農民の場合、その開墾地はゴム林ではなしにジャングルであるかもしれない。また、初年目には稲とトーモロコシの混播ではなしに、稲だけであるかもしれない。しかし、いず

れにしても、立ち木を切って初年度もしくは初年度と2年目には稲などを作り、それを漸次コーヒーに変じてゆくという基本型は変わらない。ここで重要なことは、山腹の焼畑がいわゆる普通の意味での焼畑ではなく、実はコーヒー園建設のための1ステップとしての焼畑であり、オカボ作りであるという点である。

山腹の多くの部分は数十年を経たゴムで覆われている。このゴム林自体が、上のコーヒーの場合と同じようなプロセスを経て形成されたのだという。すなわち、初年度には稲が

植えられ、それをゴム園にしたのだという。そして、このゴム林が今同じプロセスを経てコーヒーに転換されつつあるのである。上流山地の山腹では実に多くの所でこの種の疑似焼畑が行われている。タラン (talang) とかウンブラン (umbulan) とか呼ばれる新しい分村の生業は、まず例外なくこうしたコーヒー作りを中心に生きているものと考えて差し支えない。山腹とは、その外見が原始的な農法にもかかわらず、すぐれて商業的空間と考えるとよさそうである。

II 中 流 域

II-i 中流域の景観

山地を出たコムリン川は丘陵と台地に入る。最初のそれは台地に押し込められたように狭い谷幅しか持たないが、流下するに従って、やがて、よく発達した自然堤防とその背後にゆったり広がった後背湿地を持つようになる。いわゆるルバック (lebak) 地帯である。ルバックは川がパレンバンに近づくに従って一段と広がり、逆に自然堤防がそれに呑み込まれるような格好になり一大低湿地を形成する。第I章で閉塞低地とされているものは、この中流域の下位に一致するものである。

中流域のコムリン川は、こうして、例えば

それがマルタプラ (Martapura) にある時とパレンバンに近づいた時とでは景観上にかなりの相違が生ずる。しかし、それにもかかわらず、この中流域全体を通じて共通していることは、それが、丘陵もしくは台地と、自然堤防と後背地の3要素からなっているということである。それぞれの地点において3要素の占める比率は異なるが、どこでも人々は自然堤防に居を構え、後背湿地で稲を作っている。台地や丘陵はいずれも不毛の草地もしくは灌木林である。

イメージの明確化を期するために、例えばラスアン (Rasuan) からチュンパカ (Cempaka) あたりにみられる地形断面とそこでの

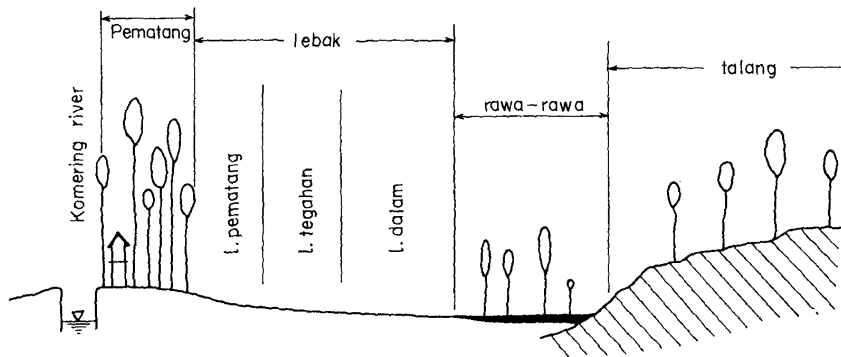


図1 コムリン中流域における住民の土地区分

土地利用を示してみよう。図1がそれである。人々は自分のドゥスの土地をその物理的性質によってプマタン (pematang), ルバック・プマタン (lebak pematang), ルバック・トゥガハン (lebak tegahan), ルバック・ダラム (lebak dalam), ラワラワ (rawa-rawa) とタランの六つに分けている。プマタンと呼ばれているのが、いわゆる自然堤防である。このあたりでは、幅100mのコムリン川にそって、その両側に幅200~300mぐらいで帯状に伸びている。三つのルバックとラワラワはいわゆる後背湿地であるが、ラワラワは通年湛水している部分である。タランというのは丘陵、台地のことである。

プマタンは高みという意味である。これはまたタナ・クリン (tanah kering) すなわち乾いた土地とも呼ばれている。5, 6年に1度の異常な洪水時にはごく短期間冠水することがあるが、普通年にはコムリン川がどんなに水位を上げて水をかぶることがない。こうした高くて乾いた環境のために、ここは、まず例外なく宅地とそれをとり巻く屋敷地の樹樹で覆われている。空からみる時、川にそってとぎれ目のない緑の帯をみるが、それはこの自然堤防上の樹園部である。ラスアン、チュンパカのあたりでは、その圧倒的大部分がドゥク (*Lansium domesticum*) とバナナで構成されている。ほかにドリアン、マンゴー、ランブータンなども少なくない。ドゥクは鶏卵大で酸味のある果物だが、コムリンのドゥクは甘味が強いということで特に有名であり極めて多量がパレンバンやジャカルタに輸出される。バナナは、その生産の半分以上が現地で蒸したり、焼いたりして、主食の一部として、あるいは果物として、消費される。なお極めて多量がパレンバンに運ばれるという。こうした産物は、ラスアンから竹の筏に乗せられること2日でパレンバンにつく。土地の仲買人は、そこで筏もろとも売り払って、バ

スで帰ってくるのである。ドゥクにはシーズンがあるが、バナナは年中とれる。ほとんどの家庭は5 a やそこいらの屋敷地を持っていて、そこからとれる果物は貴重な現金収入の1手段となっている。

ルバックは稲作の場である。これについては次節で別に述べる。ルバックの奥には、しばしば大小のラワラワが残されている。水生植物が生えては朽ちてゆくために、そこはピートと黒い水で特徴づけられている。このラワラワは乾季にはしばしば魚とりの場となる。コムリン人は川魚を好む。このことは、例えば、ジャワ人と比べてみると歴然としている。ジャワ人は油で十分に揚げてにおいを消した魚なら食べるが、いわゆるフィッシーなおいのするものは強く嫌う。しかし、コムリンでは川魚は煮つけにもなるし、スープにしても賞味される。乾季中多量にとった魚は雨季用の貯えにと乾燥されることもある。

タランは赤黄色ポドゾル土と呼ばれる、赤色の極めて貧栄養の土で覆われている。高位のために水の便も悪い。したがって、ここは普通、住民には利用価値の少ないものとして意識されている。波状にうねるこの空間はしばしば藪に覆われているが、時に高さ10mを越える木が明るい林を作っている。¹⁾かつてはトングス (tembesu) の上材が切り出されたというが、それらの巨木は今はない。過去に広く焼畑が行われて、原始の森は破壊されてしまったものらしい。上流山地の山腹部と同様手法でゴム林開設の試みがなされた形跡が所々でみられるが、それらはあらかた不成功であったようである。多くのそうしたゴムは痩せ細り、藪に混じって藪との区別がつか

1) 藪の構成種として多いのが *Melastoma polyanthum*, *Imperata cylindrica*, *Euphatorium sp.* その中に *Macaranga prunosa*, *Dilencia indica*, *Alstonia sp.* などが混入している。10m ぐらいの高い木になっているものは *Schima banchania* (tembesu)。

かないものになっている。

II-ii ルバック田

ルバックは稲作の場である。以下はラスアンのパッシラ (pasirah, 村長) から得た情報である。図2は、同氏がルバック・ダラム、すなわち最深湛水水田部における湛水深の月変化を示してくれたものである。5月から8月にかけてルバックは干上がっているが、11月と12月には2 mの深さに湛水している。稲作開始が2～3月で、終了は10月である。この意味でこの稲は完全なる減水期稲である。このことを前提条件として、以下、パッシラの説明する農作業を簡単に述べてみたい。

① 第1回目の苗代のことを、ここではアンブニ (ambunyi) という。苗代開始は2月から3月にかけてである。この時期に作られる苗代はルバック・プマタンの上に植えられる早場米用の苗代である。苗代は年中乾いているプマタン上に畝立てをして行われる。掘り棒で穿孔して、ここに軽くひとにぎりの粃を入れる。稀に散播することもある。苗代期間は20日から30日程度 (ほかの農民達はほとんどは1週間から10日間ぐらいといった。実際は10日以下のことの方が多らしい。)ルバック・ダラムのための晩生稲の苗代も同じ手法でしつらえられ

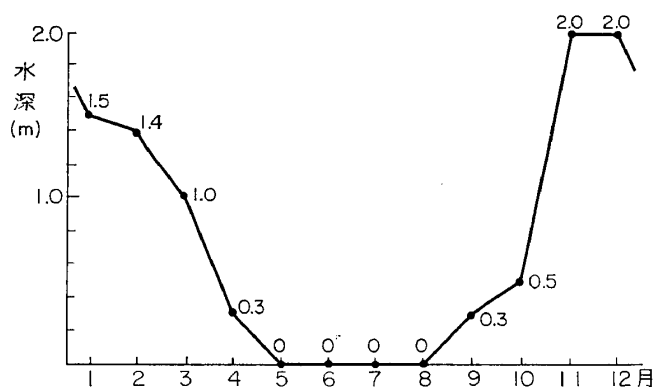


図2 ラसानにおけるルバック・ダラムの水田の湛水深の月別変化

るが、これは4月にならないと始まらない。

② 本田準備は3月になってルバックが減水し出すと、浅くなった所から順次とりかかる。最初に行う作業がアンバンチャ (ambancah)。これは旺盛に生い茂った草をパラ (parang) と呼ぶ山刀でなぎ倒す作業。20 cm 前後の水深中で行う。次にンガカット (ngakat) を行う。これは切り倒されて浮いている莫大な草を掻き集めて畦に積み上げる作業。これで本田準備は完了。鍬や鋤で掘り返すような作業は全く行わない。

③ 第2苗代。これは第1回目の植え付けでもある。本田準備中に主田の一部で若苗の植え付け可能な程度に浅く減水した所に第2苗代を作る。この第2回目の苗代のことをスマイ (semai) という。これには第1苗代から引き抜いた苗を分けて、4～5本ずつを10 cm 間隔ぐらいで植える。植え付けには、トガール (tegal) という1間ぐらいの長さの掘り棒で穿孔して、その中に投げ入れるようなかたちで植える。第2苗代には苗を本田準備が完了するまで置いておくが、普通は1カ月ぐらい。減水が予想通り進行しないで植え付けができない時は、1カ月目ぐらいに第2苗代の苗を引き抜いて再び株分けし、第3苗代を作ることもある。

④ 植え付け作業は、ナノム (nanom) という。苗は50～60 cm 以上の長大なものを用いる。1株は1～2本。この作業にはトゥンジャン (tunjan) と称する植え付けベラを用いる。根の直上にこのベラをあてがい、泥中に深く押し入れるようにして植える。

⑤ 除草は植え付け後1カ月ぐらいの時に、湛水深の浅い所のみ行う。これにはルンカウィック (leng kawik) という小さいナイフを用いる。

⑥ 刈り取りはルバック・プマタン上の早生では7月に始まる。最後に刈られるのが

ルバック・ダラムの晩生稲。しかし、これも11月中ごろには完了していなければならない。11月末になると湛水深は深くなり、せっかくの収穫が不能になってしまう。刈り取りはアニアニ (ani-ani) で実ったものから順次穂刈りする。同一の圃場でも刈り取りは一齊でないから、数回にわたって刈り取りを行わねばならない。したがって1筆の刈り取り期間は普通1カ月、長いと2カ月におよぶ。

① 脱穀は足で踏みにじって行う。脱穀したものは、昔は2～3トンは入る大きな竹籠に入れて貯えた。今は大竹が無くなったので、木の箱に入れて貯える人が多い。

以上がルバック稲作の基本的な作業である。ラスアンの場合、しかし実際にはごく小面積ではあるが、もう一つ別の稲がある。それはプマタンで行われる。前に述べたごとく、プマタンは本来果樹園である。しかし、そこにも稀に野菜などが栽培され、それに混じって稲が作られる。ラスアンの場合、このプマトンの稲は雨季作の陸稲であり、トーモロコシとの輪作を構成する。11月、プマタンはきれいに除草され掘り棒で穿孔されて、そこに稲は直播される。4月から5月に刈り取られるが、その作業は基本的には焼畑のそれである。稲のあとに、その年のうちにトーモロコシが第2作として作られる。プマトンの稲は自然堤防の発達が悪い下流に来ると急速に消滅する。カユアグン (Kayu Agung) あたりから下方のいわゆる閉塞低地になると、圧倒的な大面積がパディ・ルバック・ダラム (padi lebak dalam) ということになる。

II-iii ルバック水田の水利

ルバック水田では水は自然まかせである。したがって、そこには大規模な水利施設などというものはない。農民は各自に畦を作って水を調節しようとするが、ただそれだけのこ

とである。ルバック・プマタンではしばしば水不足の被害があるし、逆にルバック・ダラムでは時たま予想に反して早い出水が収穫を終えない田を水没させてしまう。最近では1973年が大洪水年であったし、私達が調査をした1978年も農民達は非常に心配顔であった。ルバック・ダラムの稲がまだ完全に実っていない9月末にもうルバックの増水が顕著になり出していたからである。こうしたわけで、ルバックの稲は高みでも低みでも危険がつきまどっている。この意味では中位を占めるルバック・トゥガハンが一番理想的にみえる。しかし、実際に農民と話してみると、ほとんどが低地のルバック・ダラムが1等田だという。理由は、長期にわたって水が安定していて、時たまの大被害にもかかわらず、結局は一番収量の多いのが、ここだからというのである。ルバック農業は沼地農業にもかかわらず、水不足が問題のようである。

ルバック水田の水利は大部分の所が自然まかせではあるが、閉塞低地の一部、例えばプムルタン (Pemulutan) などの先進地に来ると、それ相当の工夫がしてある。私のみだ例はトルサンジャワ (Terusan Java) という運河にそった1例である。これは人工の運河ではあるが、長年にわたってコムリン川の流量のかなりの部分を流し続けてきたので、今では高さ1メートル前後に自然堤防が築かれてしまっている。したがって、田は運河ぞいに高く、それよりはなれると低くなっている。最初ここに入植した農民達は、運河から直角に伸びる細片をそれぞれ入手して田地としたのであろう。隣の所有者との間の畦は規則正しい直線になっている。一方、同一所有者に属する1片内では区画はそれぞれの好みに応じて細分している。(図3) ところで、よくみると、こうした畦に明らかに2種類のものがあることに気がつく。一つは高さ0.7～0.8m幅1mぐらいの立派なものであり、ほかは高

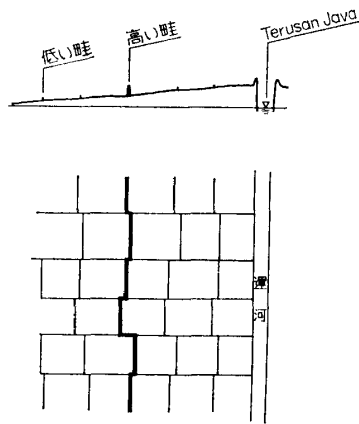


図3 ルバック中の水田にみられる高い畦は一種の貯水堤の役目をしている

さ0.2~0.3 m 幅0.3メートルぐらいの普通のものである。図にはこの2種類の畦が線の太さの違いで示してある。奇妙なことに、他人との境界を画する直線の畦はむしろ小さく、自分の田を細分する畦の中に大きいのがある。さらに注意深くみると、こうした高い畦は隣同士がおたがいにカギの手状をなして連なりあい、大略運河に平行な線をなしている。要するに、結果的には運河に平行な堤防ができているかっこうになっている。最初から堤防を予期したものでないだけに、でき上がったものはカギの手状になっているのである。

たまたま現場に居合わせた農民から、私は次のようなことを聞いた。

- ㊶ この大きなガラングアン (galangan, 畦) は雨季の始まる前にていねいに修理して水が漏らないようにする。
- ㊷ このガラングアンにそって行くと、トルサンジャワから派生する別の小さい水路に突き当たる。そこには小さいピントゥ・アイル (pintu air, 水門) があって、ガラングアンの直上の田に水が入るようになっている。
- ㊸ たまたまトルサンジャワが溢れるようなことがある。そんな時には急いで例のガラングアンの一部を切り落とし水をルバック・ダラムの方に流すが、水が適度に減ると、

崩れた個所を埋めもどして水を溜めるようにする。

明らかに、この大きなガラングアンは今は貯水のための堤防になっているのである。この大きなガラングアンの上には所々に瓜、バナナ、キャッサバが植えられている。しばしばムランチャム (merancam, 第1苗代) がここで仕立てられるという。

その後、私はプムルタンのパッシラに出会う機会があった。彼は自分のマルガ (marga) のルバックは進んでいるとあって、次のごとく話した。

㊶ ルバックは高い方からルバック・ティンギ (lebak tinggi), ルバック・トンガ (lebak tengah), ルバック・ルンダ (lebak rendah) と区別している。

㊷ オガン (Ogan) 川から幅2 mの水路が川に直角に、上記の3種の田を突き切るようにな形で掘ってあって、川からの出口にはピントゥがとりつけてある。昔は木製であったが1950年にコンクリート製に変えた。

㊸ 7月になって最低位のルバック・ルンダの植え付けが完了すると、ピントゥを閉じる。かくして、オガン川と水田は断絶されることになる。しかし、この時期でも、もちろんピントゥを開けば、ルバック・トンガとルバック・ルンダには水が入ってくる。こうしておいて水田の水位調節をはかっている。

ルバック地域では、かくして、一部では輪中化がすでに起りつつある。しかし、これは全体からみればごく一部にしかすぎない。

私達がここに滞在中の1978年10月、パレンバンでは全インドネシアから専門家を集めたルバック・シンポジウムが行われた。ルバック農業改善のためには輪中以外に方策がない、というのが全員の一致した意見であったという。しかし、この輪中化は、一方で、パレンバンに与える影響があまりに大きいために実

現不可能だともいう。パレンバンを水没させないためには、その直上にあるルバックはどうしても遊水池として存在し続けなければならないというのも、また一致した意見であったという。

II-iv ルバック稲作の歴史

ルバック稲作は中流域の中でも、下方、すなわちパレンバンに近い閉塞低地で最初に行われたらしい。その中で一つの代表的集落と考えられるシラプラウパダン (Sirahpulaupadang) でパッシラ達から聞いた話は以下の通りである。

㊦ 1920年まではこのあたりにはルバック稲作は存在しなかった。それまではプマタンの上でパディ・ラダン (padi ladang, 陸稲) を作っていた。

㊧ 1920年以前のパディ・ラダンの栽培法は以下の通りである。すなわち、乾季の間に小木と藪をパラで切りそれを焼いて、11月に6尺ぐらいの長さのトガールで穿孔して、1孔10~20粒の粃を直播する。すると、雨季を通じて成長した稲は4月から6月ごろに刈り取れる。

㊨ 原則として2~3年耕作すると、3年以上休耕した。この焼畑は河岸全体に行われたから、家から50mもはなれると焼畑になっていた。現在はこうしたかつてのパディ・ラダンの地は果樹園になっている。

㊩ 1920年に最初のルバック稲作が導入された時、それはプマタンに隣接するルバック・プマタンに植えられた。この時、ルバック・プマタンの湿地林がはじめて切り倒され開田された。その後、年が経つにつれて、より低位のルバックへやはり湿地林を開いて開田が拡大した。

㊪ ルバック稲作導入直後のころの農作業は以下の通りである。まず、粃をガニー・バッグに入れて丸1昼夜、川に浸しておい

た。その後、引き上げて、1~2日、陰に置いておくと、その一部が発芽した。

㊫ これをトゥンパット・ンルトゥ (tempat nglutu, 第1苗代) に点播した。トゥンパット・ンルトゥはプマタンの上に畝立てして作り、アンタン (antan, 杵) で大きな孔を穿ち、そこに上記の発芽した粃を播く。その後、全体をヤシかバナナの葉で覆った。鳥に食われるのを防ぐためである。第1苗代期間は約1週間であった。

㊬ 1週間後、苗を引き抜いてトゥンパット・ジャンジャラン (tempat janjangan, 第2苗代) に移植した。これはルバック・プマタンにあって、移植時には10cm 足らずの水が溜まっている。この移植にはドロック (dolog) と呼ぶ40cm ぐらいの短い掘り棒で穿孔して、そこに植えた。この作業をナンジャール (nanjar) と呼ぶ。第2苗代には本田移植までの1カ月ぐらい置いた。

㊭ 本田植えのことはバタナム (battanam) といった。これにはトゥンジャム (tunjam) という40cm ぐらいの長さのヘラ²⁾を用い、苗を泥中に押し込むようにして植えた。この本田のことをウム (ume) という。

㊮ 本田準備は、湿地林にはじめて開田する時は大木を倒すためヨキなどを要したが、1度開田されてしまうと小木と草だけになるのでパラ・パンジャン (parang panjan, 大刀) だけで十分である。鋤、鍬の類は全く使用しない。

以上述べられた1920年代のルバック稲作の作業内容は、現行のルバック稲作のそれとほとんど変わらない。ただ、ここで極めて興味深いことは、深く湛水する本田のことを“ume”と呼んでいることである。現在、マラヤ世界で“ume”(あるいは“huma”)とは明らかに“sawah”に対立する概念である。“sawah”

2) トゥンジャムはヘラだから、その断面は直線状。一方アンタンやドロックは棒でその断面は丸型。

は水田であり“ume”は焼畑である。湛水した田圃に植え付けされるこの作業が焼畑として理解されていたのは実に面白い。

ところで、前記のラスアンのパッシラも、ラスアンのルバック稲作は今から40年前にはじめて同地に導入されたものだといった。彼によると、ルバック稲作はシラプラウパダンなどのある下流の閉塞低地から導入されたものだという。それ以前のラスアンの食糧生産といえばプマタンとタランで行われていた焼畑だけしかなかった。彼らはたいてい6カ月もの陸畑を作り、時にトモロコシや豆、野菜と混植した。そして、3年連作するとそこを放棄し、15～20年後にまた元の場所に帰ってくるのが常であったという。パッシラは何のコメントも加えなかったが、例のラスアンのプマタンの上に、今では屋敷畑にとり入れられた形で細々と作られている雨季直播稲をみて、私は、なるほどこれが古い焼畑時代の稲作の遺物なのかとひとり合点するのであった。³⁾

II-v 景観の大変ぼう

コムリン中流域の地形の骨子は先にも述べたごとく、川があり、その両側に自然堤防が発達し、さらにその背後に後背湿地が広がるというものである。それを住民達はスンガイ(sungai)、クブン(kebun)、ルバックとして鮮明な生活感覚をもって区別している。スンガイはそこから飲み水が汲まれ、洗濯がされ、水浴がされ、さらに排泄までが行われる。そこは生活の中心であると同時に社交の場でもあり、また交通の幹線でもある。クブンは果

樹の濃い樹冠がひんやりとつめたい影を落とす屋敷地である。川筋からみる時、明るい川べりに面した深い緑と、その間に垣間みえる赤褐色の屋根瓦はどこでも一幅の絵になる。それは、清潔さと安堵感が一種の調和を持って共存するものであり、みる者を豊かな幸福感に浸らせる。クブンの背後に出ると、しかし、雰囲気は一変する。一木もないルバックの景観は水田というにはあまりに粗野であり、さりとて大湿地というにはあまりに細切れに乱されてしまっている。

川をとり巻くこのワンセットの景観は、しかし考えてみれば、ごく最近作られたものといわざるをえない。シラプラウパダンのパッシラがいうように、自然堤防上では数年周期の焼畑をくり返していたのだとしたら、川岸は当然草地かせいぜい藪で、巨木はなかったはずである。現にシラプラウパダンやラスアンのパッシラ達は、焼畑時代の最末期には盛んに果樹が植えられ、それが今日の果樹園を形成したのだと言明している。一方、ルバックは当時、逆に湿地林で覆われていたと証言されている。人々は、しばしば、例えばルンガス(rengas)などの巨木を切り倒したという思い出を語る。

全く偶然のことではあるが、私はたまたまクブン成立以前の景観に出くわしたことがある。それはオガン川北岸でバトゥラジャ(Baturaja)より約40km東北、プニンジャワン(Peninjawan)とサウンナガ(Saungnaga)の間のことである。1978年10月3日、例年になく早く膨れ上がったオガン川は、あと1.5mも増水すると自然堤防を溢れるほどになっていた。湛水していない自然堤防の幅は約300m。その背後に湛水した後背湿地とその中に湿地林らしいものが残ってみえていた。自然堤防の上には、ほとんど一草もない。この自然堤防からは当然、後背湿地が見渡せるのであるが、そのどちらにも畦らしいものはみえ

3) 最近、政府の指導でゴゴ・ランチャ(gogoranca)と称して、プマタンで雨季直播稲を作ることが広がっている。これは、今から10年ほど前から現れ出した新品種普及政策の一つであり、ここでいう焼畑とは無縁のものである。しかし注意してみないと、両者の区別は外見だけでは極めて識別しにくい。

ない。しかし、実際には、この自然堤防にも後背湿地にも稲が作られるのである。以下はここを所有する農夫の話である。

㊦ このオガン川ぞいの高み（自然堤防のこと）はパダンガン・クルバウ (padangan kerbau, 水牛の原) といって、元来水牛を放牧しておく所だ。その一部を柵で囲って稲を作るのが普通である。

㊧ 今年は雨が多いので、むしろ小部分に柵をしてそこに水牛を閉じ込め、大きな部分に稲を播こうとしている。10月7日にはトガールで穿孔して点播することに決めている。雨の来ようによって、毎年、稲を播く面積は大幅に変化する。

㊨ ルバックには別に減水期稲を作る。これはパダンガン・クルバウでしつらえた苗を5～6月に植え付ける。しかしルバックの全てが移植田とはかぎらない。所々、高くすでに乾き上がったような所には直播稲を作る。

㊩ この自然堤防上の雨季直播稲栽培は大昔からあるものだ。それにこの村はゴムも多く作る。ただ、最近ではゴムが不景気で約半数のひとが村を捨てて転出していった。おかげで、パダンガン・クルバウの稲作もさびれてしまった。

1920年代以降の景観の変化は自然堤防と後背湿地にだけ起ったのではないようである。丘陵や台地上にも起ったといわれている。こうした高みではそれまでの焼畑に起因した藪が急速にゴムに置き換えられていったという。今でこそゴム林はジャングル化しているが、ゴムが高値の時にはゴム林はもっときれいに保存されていたという。この地にゴムが導入されたのは今から50年ほど前のことだったという。おそらく、そのころからコムリン中流域はパレンバンの経済圏に強く巻き込まれたものであろう。タランがゴム林に変わり、スンガイぞいのプマタンがドゥクやドリアン園に

変化するのはこのころからなのであろうか。

II-vi ルバック稲作の範囲

パレンバンからムシ (Musi) 川本流ぞいに約 15 km 下ったチンタマニス (Cinta Manis) がルバック稲作の最下限である。ここにはルバック稲作と、それとは別にパディ・パサンスルット (padi pasang surut) と呼ばれる雨季稲が共存している。チンタマニスといえば、すでに潮の干満の差は 1.5m に達し海の影響がかなり強く感じられる所である。

チンタマニスのパッシラ達によると、コムリンームシ川ぞいの稲は前からパレンバンを境にして2地区に分けられていたという。パレンバンより上流をウルアン (Ulu-an) といい、ここは乾季稲のルバック稲作地区と考えられていた。そしてそれより下流をイリラン (Ili-ran) といって、雨季作地区としていた。当然チンタマニスはイリランに属し、雨季作地区である。ところが、たまたま1938年ネズミと虫が大発生しその年の雨季稲は潰滅的な被害を受けた。食べ物が無くなった住民は急きょウルアンから種子を購入し、湿地の中の水溜まりに急ごしらえのルバック稲を植えたという。この時、チンタマニスの住民の4割がルバック稲をはじめ採用し、それ以後チンタマニスは雨季作、乾季作の両方を作っているという。今では、雨季作はムシ川の自然堤防周辺に、そして乾季作のルバック稲はそれより奥まった通年湿性の後背湿地に作られている。

後背湿地で乾季作を作る農民になぜそこでルバック稲のみ作って雨季作を作らないのかと聞くと、雨季稲だと開花期が3月になり冠水の危険があるからだという。だからといって、冠水を恐れて背の高い品種を作ると、今度は倒伏して結局水没してしまうからだという。百姓は、彼の後背湿地中の水田の月別水深図を図4のごとく示してくれた。

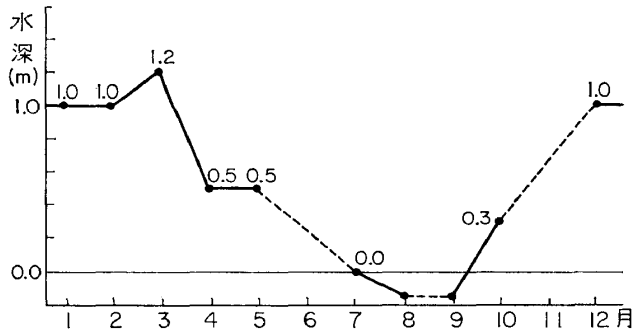


図4 チンタマニスでパディ・ルバックを作る農夫の水田の月別湛水深。ここはすでに感潮部であるが、湛水深は満潮時のものが記録されている。7月の満潮時湛水深は田面ギリギリという。8月、9月は田面より明らかに低いが、いくら低いかは不明という。6月、11月の湛水深については、くり返し質問したが答が得られなかった。

一方、川に近く自然堤防上で雨季稻を作る農民に、ここで乾季稻が栽培できないかと聞くと、ダメだという。7月、8月には地面が乾ききってひび割れがするほどだから、稻は生きておれないという。彼によると、雨季なら満潮時には水が田に上がってきて、稲作りにはちょうど好適だというのである。チンタマニスは、まさに後背湿地型の深湛水と、海岸型の感潮帯がおたがいに会う所なのである。チンタマニスのパッシラのいうごとく、ウルアンの下限は原則的にはパレンバンであるが、実際のルバック稻の分布はそれより下流に伸びチンタマニスに至っている。

ルバック稻の上流側は少なくともマルタプラよりさらに12~13km上流のブンガマヤン(Bunga Mayang)までは至っている。おそらく、もう少し上流に伸びるのであろう。ここはすでに述べたごとく、上流山地と中流部の境界そのものである。このブンガマヤンには、コムリン川の1支流にかけられた井堰が30haの水田を灌漑している。そのさまは上流山地の灌漑田に酷似している。しかし、同じこのドゥスンで、丘一つを隔てた別の谷には小さなルバック水田がある。結局、水源が確保され流水の得られる所では雨季稻が、一方、水源が無く、それにもかかわらず難排水の所ではルバック水田がみられるわけである。こうして、ルバック稲作はその上限は灌漑田と混じて中流部最上端に至るのである。

コムリン中流域は、その圧倒的大部分がルバック水田で覆われている。しかし、ここにも雨季稻は無いわけではない。排水が可能で水深調節の可能な所では雨季稻が作られる。それらは多くはタランの末端や川ぞいのプマタンの一部に散在している。こうした水田のことを人々はタダ・フジャン (tadah hujan) と呼んでいる。雨 (hujan) を受ける (tadah), すなわち天水田である。最近の傾向はタダ・フジャンの拡張である。中流域は元来、乾季稻栽培地区だが、おいおい雨季稻が侵入しつつあるというべきかもしれない。

III 海岸低地：その1

III-i 合流点集落

パレンバンより下流をここでは海岸低地とする。パレンバンより上の中流地域に比べるとこの海岸低地は全く異質の世界である。水文学的にみて前者がより河川支配型であるのに対して、後者はより潮汐支配型であるということはすでに述べた。しかしそればかり

ではない。中流域の川岸が見事な果樹を連ねて、その背後にはルバック水田を展開していたのに対して、海岸低地では野生の湿地林が全体を覆うようになる。なかでもプダダ (pedada, *Sonneratia caseolaris*) というマングローブの一種は、川中に入り込んでしまっ、川と岸との境界を不明瞭にしてしまっている。さらに、集落の間隔が極端に長くなる

のも海岸低地の目立った特徴の一つである。中流部ではほぼとぎれなく続くとさえ思われた集落⁴⁾が、ここでは20~30 kmに一つぐらいの割合でしか存在しない。あるいは、櫂舟で1日の行程に1集落かと思うくらいである。こうした原始に近い状態という感じは、旅行者の私がそうみるだけではない。コムリン人自身の持っているイメージが“陸地はパレンバンまで”であり“それより下流はひとの住む所じゃない”というのと一致している。

ムアラトラン (Muara Telang) はこうした海岸低地にある集落の一つである。パレンバンから下流に約80 km, スピード・ボートを飛ばしてもうすっかり湿地林に見飽きたころ、突如としてココヤシの純林が現れて度胆を抜かれる。これがムアラトランである。ここには五つのドゥスンがくっつきあうように集まっていて、マルガ・ムアラトラン (Marga Muara Telang) を構成している。マルガの人口は13,076人。(1978年現在) 大湿地の中の集落にしては予想に反する大人口に驚く。しかし他の集落もかならずしも小さくはない。こうした大自然の中にひとが住んでゆくためには、ある程度のまとまった人口の集中が必要なのだろうか。以下はこのマルガのパッシラから聞いた話である。

① ムアラトランは300年の歴史を誇る古い集落である。このドゥスは昔タラン・ムアラ (Talang Muara) といった。川の合流点 (muara) に高い杭 (talang) を立てて、その上に住んでいたからである。

② 今では、ココヤシからのコプラ製造、魚とり、稲作が主たる生業である。しかし、昔は湿地林から材木を切り出してくるのが最も重要な仕事であった。ほかに、籐、パ

ラス (palas) と呼ぶヤシの葉集め、魚とりなどを行なった。稲作はほとんど無視されていた。

③ その後1960年代の初めごろまでの1時期、歓楽街となった。女が集まり、音楽が鳴り、パレンバンから多くのひとが遊びに来た。

④ 米は1963年までは多量に外部から購入していた。1964年から1968年まではちょうど自給が可能であった。しかし、その後は余剰米を売りに出している。

⑤ 昔の稲作といえば雨季の焼畑であった。稲作が改善されたのは1970年、ブギス (Bugis) が入植してきてからである。

上の情報は、彼らが農民というよりは、湿地林からの採集者であったことを強く示している。彼らは集荷に便利な川の出合に集落を築き、そこに時折り立ち寄る商人達に採集品を引き渡しては食糧を得ていたのである。

そういえば、前にふれたチンタマニス自体、すでにこうした採集型の生活の痕跡を多くとどめている。チンタマニスのパッシラは私達にいった。チンタマニスにはまだ土地が多く残っている。10 ha から20 ha を所有するのは普通である。ただそのうちで毎年稲を植えるのは各戸2 ha くらい。現在、住民の60パーセントは農閑期には籐集めに歩み、それでイスやカゴを作る。実際、チンタマニスの工芸品は有名なのです。それにしても、ウルアンからの無断耕作者が多いのに困ります、と。

海岸低地の生活基盤は伐材を含めて湿地林からの採集であり、農業はあまり重要でなかった。とはいえ、農業はかならずしも完全に欠如していたわけではない。ただ、その性格はもう一つ判然としない。ムアラトランでは、それは1年で放棄する雨季の移植田であったという。チンタマニスの1938年以前のもも似たようなものである。チンタマニスでは、それはタフナン・ラモ (tahunan lamo) とい

4) けっして列状集落ではない。一つ一つは極めて明瞭な塊村である。ただ、おたがいに接近していて、一見連続しているかのごとく見えるということである。

って、現存のルバック稲作に似ていたという。ただ異なる点は雨季作で、9カ月という長期種を休閑しながら植えたという。ムアラトランとチンタマニスの間にあるもう一つの集落スバリック (Sebalik) では、ほんの4年前まで伝統的稲作が残っていたという。それは3年連作、5年休閑の雨季稲作だったという。このドゥスンの場合、遠い水田は集落から15 kmの先にあり、そこに舟で農作業に通ったという。

ところで、こうした稲作について土地のひとはいろいろ教えてくれるのだが、どうもその細部についてのイメージが私には湧いてこない。長々と説明してくれたスバリックのクリオは最後にこういうのだった。「昔の方法はラダン (ladang, 陸稲) ともフマ (huma, 焼畑) ともいうのです。だが、フマという語がより正しい言葉です。だけど、結局、ラダンもフマもサワ (sawah, 水稲) も同じものなのです」。この言葉は私を一層混乱させるだけであった。

III-ii ムアラトランの土地利用

過去数年のムアラトランの土地利用には急激な変化があるとはいえ、今だに伝統的土地利用が窺い知れると思われる個所が随所に見られる。その一つをマルガ・ムアラトラン

の中のドゥスン・タラン・ルバック (Dusun Talang Lebak) に例をとってみてみたい。例のズバリックのクリオによってフマともサワともいわれるものがこんなものであろうかと想像するからである。

図5はアイル・タラン (Air Talang) ①からほぼ直東に約1 km 伸びる断面である。ここでのアイル・タランの川幅は約20m。湿地林から出てくる腐植酸で水は真っ黒である。川岸は干潮時には約2 mの崖をみせるが、満潮時には完全に没する。川岸に近く、時に第1苗代②が作ってある。川岸にそって幅1 mくらいの小径③があるが、これは満潮時でも水面に出るように20~30 cm ぐらい盛り上げてある。その背後に幅200mのココヤシの成木園④がある。これは畝と溝に作っていて、溝深さは60 cm ぐらい、そこには潮が自由に出入りしている。遠望するとこの部分は完全にココヤシの純林にみえるが、実際中に入ってみるとマンゴー、ジャンプー、ランブータン、バナナなども散在している。続いて、若いココヤシとバナナ⑤、約150m幅。ココヤシよりも今ではバナナが大きく、バナナ園といった感じがする。これも畝と溝の組み合わせになっている。次の約100m幅⑥はやはり畝と溝に仕立てられている。しかし、ここには何も植わっていない。畝は全面のぼたん

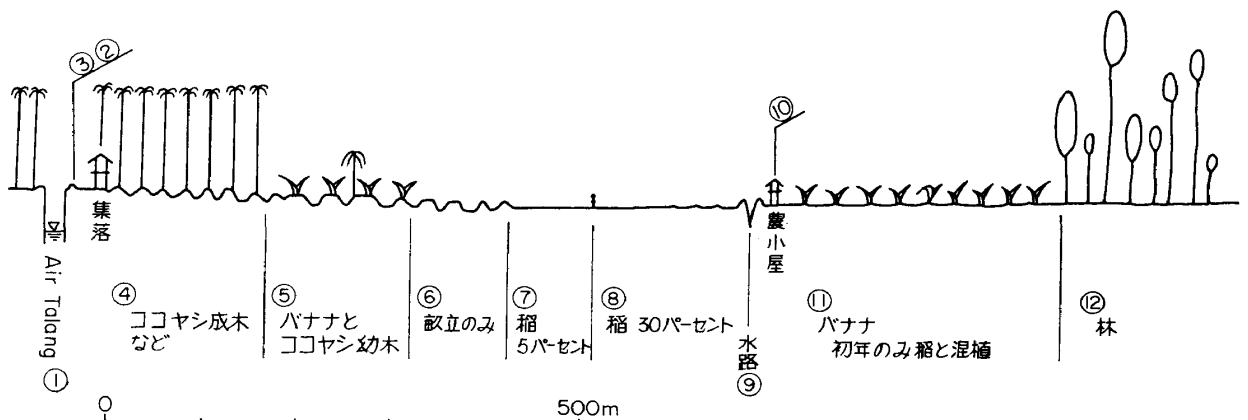


図5 タラン・ルバックにおける土地利用

(*Melastoma*) の藪で覆われているし、溝部にはカヤツリ草 (*Scirpus*) が多い。続いて畝立てでも何もしていない *Melastoma* 原⑦。所々は *Scirpus* の群落がある。約 100m 幅。案内の土地のひとはここに稲を植えるというが、一見ただけではそうとは思えない。しかし、よく探しまわると、この草原の 5 パーセントぐらいの所には点々と稲の古株が残っているのがみえる。この区画と、その次の区画⑧の間には、かなり頑丈な木の柵が築いてある。この柵より東では *Melastoma* もあるが、むしろ *Scirpus* がより広い部分を占めるようになる。その中によく分株した稲の古株がかなり多くみえる。明らかに去年はこの区画のかなりの部分に稲が植え付けられている。しかし、幅 150m あるこの区間も東側の約半分は小さな起伏が多くて、再び *Melastoma* が多い。よくみると、この起伏は巨大な倒木である。こうした倒木の多い *Melastoma* の間に分け入ると、稀に 3 m × 5 m ぐらいの場所がきれいに切り払われていて、そこに第 2 苗代が作られている。ほじくり返された地表は真っ黒でピート層である。そこには 1 孔に 10~15本の苗が 10 cm 間隔ぐらいで植えてある。こうした第 2 苗代は *Melastoma* の藪の中に没していて、ちょっとしたことぐらいでは見出せない。案内のひとによると、この区画は今年、全面その藪がなぎ倒されて、苗が植え付けられるのだという。やがて、幅 2 m、深さ 1.2m の水路⑨に来る。アイル・タランの水はこの水路に入ってくるのだという。

水路側面の土壌断面は地表面をなす 7 cm が完全なピートであり、その下位は約 1 m にわたりピート質、もしくは多量の木片を含んだ重粘土からなり立っている。さらにその下方には毒性のある硫酸酸性土壌が顔を出している。要するに、このあたりは、毒性土壌をその下に持ったピート質土地帯なのである。

水路わきには私が質問をした農夫の小

屋⑩がある。その背後が幅 300m のバナナ畑で⑪、さらにその奥にかなり広く続きそうなジャングルがある⑫。ジャングル中には、20 m をゆうに超す大木が何本も立っている。以下はこの農夫に聞いた話である。

㊦ 小屋の東側のバナナ畑⑪は、おとしし、その背後にあるのと同じジャングル⑫を焼いて開いたものである。開墾した年にはバナナを植えて同時に稲を植えた。苗はアイル・タランの川岸②に仕立てたムランチャムから *Melastoma* の原⑧に移し、さらにここ⑪に本植えをした。移植時には湛水はなかったが、歩けば水がしみ出るほど土が十分湿っていたから十分植え付けられた。

㊧ 今年はバナナが相当大きくなってしまったけれど、まだ隙間があるからもう 1 年だけ稲を植える。

㊨ *Melastoma* の原⑧には来月 (11月)、植え付けを行う。まず、*Melastoma* を大刀で切り払って、それを畦に積み上げる。火入れはしない。刈っただけのあとに植える。植え付け中には湛水はないが、2月と3月には 10~20 cm の水が溜まる。

㊩ ⑦と⑧の区域では毎年、その面積の半分ぐらいが植え付けられる。

㊪ バナナ畑⑪も、*Melastoma* ⑦と⑧の原も、同じ品種を同じ手順で植える。まず、第 1 苗代として川岸で約 15 日間。次にスマイが本田近くで約 30 日間。植え付けはいずれも掘り棒で穿孔して行う。

私にはどうみてもこの原野の半分が毎年植え付けられるとは見えなかった。せいぜい 5 分の 1 ぐらいという感じだった。しかし、いずれにしても一種の bush fallow であることには間違いはない。彼の育てているバナナ畑というのは、むしろ近年、新しく出てきた方法らしい。伝統的には、バナナなどは植えずに、むしろ bush の fallow にしたらしい。こう

したものが結局スバリックのクリオのいうフマであり、同時にサワといわれるもののものである。

ピートと倒木の低地。それは、ひっきょう本来のラダンを行うにはあまりにも湿りすぎた土地なのだろうか。湿りすぎているがゆえに完全燃焼が不可能であり、それは倒木の山を残すことになり、それゆえに、結局は直播を許さないくらい多量のネズミをかかえ込んでしまうということになるのであろうか。こうした所では、ひ弱な苗は大事に家の近くで育てられ、獣害に耐えられるほどに大きくなってからはじめて野におろされる。私は、このタラン・ルバックで、農民がアイル・タランの川の上に小屋を建てて苗代を作っている

のをみたことがある。ネズミの襲来を避ける最良の方法は、水上の小屋で苗を作ることだという。あるいはまた、多湿なピートの上では発芽障害があるのだろうか。

⑦⑧⑪⑫などの bush fallow の原野からアイル・タランの川岸に近づくと、そこには全く異質な空間がある。例の畝立てをしたココヤシ園④だ。どの木も見事な成長を示している。しかし、どの木もせいぜい樹齢20~30年ぐらいのココヤシだ。コムリン中流域のドックやバナナ園と同じく、新しい商品作物の空間がここにある。南スマトラでは、至る所で焼畑と bush fallow とが商品作物と背中合わせでくっついている。

IV 海岸低地：その2

IV-i パサンスルット (pasang surut)

稲作

チンタマニスにしろスバリックにしろ、ムアラトランにしろ、パレンバンのスルタン時代にパレンバンから移住してきた人達が作った古い集落だ。彼らはいずれも川の出合を占居して、湿地林からの収集物を売り出して生きてきた。したがって、その集落の分布は集荷と積み出しを中心に考えた点としての性質が強い。これに対して、海岸低地を面として開拓し、そこに生活空間を拡げようとする一群が最近とみにその数を増してきている。

パレンバンで海岸低地の農業の情報を集めようとする、誰もが、ブギスのパサンスルット稲作のことをいい出す。政府の人達も学者も一般人もかならずブギス移民のことを持ち出す。ブギス達はクパラ・パリット (ku-pala parit) と呼ばれる指導者に率いられて、20~30家族が群をなして到来し、湿地にセル

ダン (serdang)⁵⁾ という木が生えているのをみつけると、そこが稲作適地だとしてすぐに水路を掘り開墾してしまうというのだ。適当に4~5年収穫を得るとまた新しい適地をみつけてそのまま立ち去るともいうし、いや彼らは4~5年の稲作のあとそこにココヤシを植えその後立ち去るから、彼らが一度住んだ所はかならずココヤシが植わっているともいう。いずれにしても、パレンバンでは、近年海岸低地に突如出現したブギスのことを、その勤勉さと旺盛な生活力のゆえに一種の畏怖の念を持って話すのである。ブギス拡散域の中心部に位置するムアラトランのパッシラによると、彼のマルガに最初のブギスが到来したのは1972年。その時は3人であったが、今(1978年)では約2,000人に増えてしまったというのである。

私達が最初のブギスとインタビューを行な

5) ヤシの一種 *Pholidocarpus slematrana*.

ったのは、スバリックとムアラトランの途中、ムシ川に面して建てられた P4S（海岸湿地開拓計画のキャンプ）近くであった。その海岸には5軒のブギスの家が並んでいて、あたり一面は広大な草地がムシ川ぞいの幅 1.5 km ほどの所に広がっていた。そこには木は1本もない。この草地が、しかし、水田なのである。草地とみえた所に入り込んでみると低い畦がある。インタビューは、そこで第2苗代の植え付けを行っていた55才の農夫と行なった。農夫はいうのである。

- ㊦ 15日前に家の近くに作っておいた第1苗代から、今日この第2苗代に移植中である。
- ㊧ この第2苗代を整地する時はバンクン (bangkung) と称する大刀で最初の荒刈りをし、次に、一種のクマデを用いて、その刈り倒した草を掻き集めて畦に積む。その後、もう一度、同じバンクンで今度は土を浅く切るようなかたちで根元から刈りなおす。これで整地完了。
- ㊨ 次にチュチュック (cecuk) という短い掘り棒で 15 cm 間隔ぐらいに穿孔し、20本ぐらいの苗を挿し込む。この時期には田には湛水はない。第2苗代期間は45日間ぐらい。
- ㊩ 本田準備も第2苗代と同じように行う。自分ひとりで行うが、1 ha の整地に1カ月かかる。本植えにもやはり、チュチュックを用いる。この時は1孔には2～3本の苗を植える。苗は第2苗代にある間に 50～60 cm に伸びているので、それを 30～40 cm に切りそろえる。この本植えの時期にはたいてい降雨が激しくなり、満潮時には田面に潮が上がってきて、満潮時には 20 cm ぐらいの湛水となる。植え付けだけは女房も手伝う。
- ㊪ 植え付け後1カ月で除草する。除草には小型のパラン (刀) を用いる。

㊫ 人を傭うとすればこれは刈り取り時のみ。パレンバン方面から来るジャワ人を傭う。刈り取りは爪鎌で行う。年によっては全部の穂は刈り取りきれないで、そのまま田で朽ちることもある。

私の興味の焦点は二つの点にあった。第1は、パサンスルット稲作とは本当に移動耕作なのか。第2に、これほどの勢いで拡がりつつあるこの稲作は、いったいどんな未来をこの海岸低地にもたらすのか、ということであった。農夫の話をもう少し続けて聞いてみよう。

㊬ 自分は5年前にスカユ (Sekayu) からここに移ってきた。スカユにネズミが大発生したので、息子夫婦だけをそこに残してここへやってきたのだ。ここについた時にはここはもう草地だった。自分達が入植する4年前に森が切り払われたのだと聞いている。

私にはこの発言は腑に落ちなかった。パレンバンで聞いていたブギスの習性と違ったからである。森を選ばないで、なぜこの男は草地で満足したのか。それに対する答は以下の通りである。

㊭ それは人好き好きです。たしかに森を切ったあとには素晴らしくできることがある。しかし逆に全くできないこともある。森の直後はできむらが大きい。それに比して草地跡は1株の分株はそれほど大きくないが、毎年収量が安定している。

しかし、草がはびこって除草が大変でしょうと問いただすと、

㊮ それは大変です。森を切ると、初年度は草は全く生えない。2年目には少し出てくる。3年目からは全面草原になる。しかし、植え付け前に除草さえしっかりしておけば、草は問題ではない。結局、草をとる気があるか無いかの問題なのです。

実際、彼の田は一面の草原ではあるが、そ

の大部分が1年生の禾本科であるのに驚いた。同じような条件の所でムアラトランの場合は多年生のカヤツリ草と *Melastoma* が主体であった。このブギスの田では、明らかに草は普通の熟成した水田のそれに近いものになってしまっている。

でも、ブギスは数年後ココヤシを植えて別の所に田を開くと聞かすが、やはり草地を嫌うのですかと続けると、

⑧ ココヤシは作る。しかし、それは屋敷地にするためです。一旦、屋敷地に仕上げたら別の所へ動くなんて馬鹿げている。むしろ、そのまわりの田により集中した方が得策です。もっとも、田を捨てて移動することも無いことは無いが、それは草のためではない。たいていはネズミにやられてどうにも仕様の無い時です。それに、最近は何もできない。土地がもう不足気味になっていて、パッシラから新しい土地使用の許可をもらうことが極めてむずかしくなってきたからです。

彼らは結局、多くの人達によっていわれているような流動的な耕作者ではないのだ。

インタビューを行なった1978年10月9日の朝、彼の田から約400mはなれたムシ川には約2.5m高さの崖が露出していた。屋ごろ満潮になった時、崖は0.3mになっていた。11月中旬には満潮時の潮は田面に上がり込むのである。

上記の P₄S のブギスの場合は川に近いし、また単独の入植者だから水路は掘っていない。しかし、ブギスの多くはたしかに集団で入植し、協同で水路を掘る。ウパン (Upang) に入植した別のインフォーマントの場合、8年前に20家族でジャンビ (Jambi) から移住してきているが、彼の場合、クパラ・パリットの許に協同して1.5km長さの水路を掘り、20戸がそれぞれ水路ぞいにはほぼ等間隔で家を立てて住んでいる。水路は1.5m幅、1m深

さで、それは開墾当時に出くわした大木を浮送するのにちょうどぎりぎり間に合う大きさであった。彼らの場合、もちろん米作りが主目的であったが、材木からの収入も無視し得なかったという。しかし、いまではもう材木も無くなり、この水路は通路であると同時に、集中豪雨時の排水路、満潮時には河水を導き入れる灌漑水路の役目を果たしている。

ところでパサン (pasang, あげ潮) スルット (surut, さげ潮) 農法の実態であるが、先の P₄S の農夫の場合にしろ、このウパンの農夫の場合にしろ、たしかに作季中の彼らの水田には潮が入り、言葉の意味する通りの実態になっている。しかし、全てのパサンスルット田がそういう状態にあるかといえばそうとはいえない。私の観察では、いわゆるパサンスルット地域の半分以上の水田は潮とは無関係のようである。潮の干満の影響を受けるのは大河ぞいのみである。川から遠い部分では田面の水環境は潮汐とは無関係である。後者の場合、稲作は雨季の天水に頼っているにすぎない。いわゆる天水田である。しかし、それにもかかわらず、この全域がいわゆる潮汐灌漑のポテンシャル地域であることには間違いない。灌漑局のウパン試験農場の Ir. Prayoto によると、潮汐を利用して、ほんのちょっとした揚水で二期作可能なのがこの海岸低地全域の特性であるという。彼によれば、水路網不足のために現在では自然の水路の近くだけが潮水の恩恵を受けているのだが、ゆくゆくは水路網の拡充でこの地域全体は一大潮汐灌漑二期作地帯に変貌するはずだという。海岸低地は、水文条件のみを考える時、潮汐灌漑可能地という大きな利点を持つ地区と考えてよさそうである。

IV-ii ブギスの役割

こうしたセンセーションを起しているブギスのパサンスルット稲作はどこから来たので

あろうか。一日、私達はムシ水系中のブギスの最大のクバラとされているアミヌディン(Aminudin)氏をパリット・プラジェン(Parit Perajen)に訪れた。彼は27年前にセレベスのボネ(Bone)を出てスマトラのリアウ(Riau)に渡ったが、12年前ここに移ってきたひとである。彼の経歴などについては別のところで詳述されようから、ここではくり返さない。ただ、彼が稲作について語った所だけをとり上げる。

㊦ 自分の故郷のボネの稲作は、今ここで行なっているものとは全く異なる。本田準備は牛か水牛を用いて耕起と代掻きの両方を行う。苗代は散播苗代で移植は1回しか行わない。移植は指で行い、掘り棒は用いない。ただ刈り取りには爪鎌を用いる。

㊧ ここに来る前、リアウのクアラ・エノック(Kuala Enok)に10年以上いた。リアウの稲作は刀で藪を切り開き、掘り棒を用いて2回移植を行うもので、基本的には、今ここで自分達が行なっているのと全く同じだ。

㊨ リアウ達は3年間稲を作ると、そこを放棄する。そして、しばらくしてカユ・マハン(kayu mahan)やプライ(pulay)などの小木が生い茂るようになるとまた帰ってくる。新しく森から開田する時には、しばしば幅1mぐらいの水路を掘る。潮水を入れることはよいことだと考えているからだ。

㊩ もっとも、彼らにとっては、ココヤシ作りは稲作りよりもっと重要なことだ。3年の稲ののち潮水の入るようになったその場所に畝立てをして、稲の代りにしばしばココヤシを作る。さらに、リアウには湿地中に所々に島の高みがあるが、そうした高みはもっぱらココヤシ用の土地だ。そこでは林を焼くと初年目にバナナとココヤシの混植をするが、やがて全面ココヤシ園に

なる。かくて、今ではクアラ・エノックは、ココヤシと稲が面積としては半々といった感じだ。

こうしたリアウの話聞きながら、私は、同僚前田成文のフィールド、ブキットペゴ(Bukit Pegoh)村⁶⁾を思い浮かべていた。それは、ちょうどリアウの対岸、マラッカのすぐ南にある小さい稲作村だ。17世紀にセレベスから移住してきたブギスの村だという。そこを訪れた時の印象は今だに極めて鮮明である。そこは今では見事に稲で覆われてしまっているが、よくみるとなお随所に湿地の面影が残っている。そして、それとは対照的に小丘上の見事なココヤシの茂み。あの湿地的な水田とココヤシ林との組み合わせは、まさに今述べられているクアラ・エノックの延長そのものではないのか。セレベスからの移住者が、マラッカ海峡ぞいの低地焼畑をここまで変容させたのだ。ブキットペゴ村はマラッカぞいの海岸低地の行く先を暗示しているようにみえてならない。

ところで、ムアラトランやスバリックのムラユ(Melayu)達は、ブギスの到来後、急速に定着稲作を習得し、それを自分達のものにしているといっている。一方、ブギス自体はその稲作をリアウから教わったといっている。リアウ農業がブギスの手によってムシ川河口のムラユに伝達されているということになる。しかし、考えてみれば、これは少しおかしい。なぜなら、リアウ農業の内容は、実はムシ川下流のムアラトランやスバリックで伝統的に行われている稲作とまったく違わないからである。両者とも基本はbush fallowをとまない、低湿地での移植栽培である。もし、唯一の差異点を指摘するとすれば、ただそれは、

6) これについては、前田成文、1976。「マラカの出稼ぎ農村ブキットペゴ」『マレー農村の研究』口羽益生；坪内良博；前田成文(編著)、第3部所収。東京：創文社を参照されたい。

リアウは潮水の働きにより意を用いるというだけのことである。

ムシ川下流が急速に変容しつつあるという現象の本質は、むしろ、以下のように考えるべきものではなかろうか。すなわち、fallowを許されない状態に置かれたブギスが、与えられた潮汐灌漑移植プラス bush fallow という組み合わせのうち、たまたま潮汐灌漑移植という側面のみを継承せざるをえない状態になったのだと。例えば、P₄Sのブギスもいったように、彼ら自身も移動にはそれほどとり立てていうほどに抵抗もない。現に彼らは移動をくり返して今の場所に到来したのだ。ただ、現在ではもう、地元のパッシラからそうは簡単に土地の使用許可を受けることができなくなってしまった。結果は定着ということに否応なしになったのである。かくて fallowの放棄が一種の外圧で起っている。ところが、この定着化は、全般に fallow 適地が減少している今日では極めて時を得た方策として急速に拡がり、かつての fallow 愛好者のムラユの間にも受け入れられる機運が強くなったのだ、と。クアラ・エノックから bush fallow をとり去ったら、前田のブキットペゴ村になるだろうというのが私の考えである。過去の歴史の中では、いくつかの時点でこうした外圧に支配された定着化が局所的に起っていたに違いない。そして、それが今は、極めて大きなスケールで、ムシ川河口に起りつつあると考えたらいかかであろうか。

IV-iii ムラユ中での変化

上に述べた移動耕作から定着耕作への転換は、ブギスの移住を契機に、在来のムラユの間にも広く伝播しかけている。この意味では、パサンスルット稲作とは、言葉の意味する通りの潮汐灌漑稲作ということよりも、むしろ、定着農耕としての意味が大きい。

ある日、私達は、またブギスを訪れるべく、

一つの水路ぞいに入っていた。しかし、実際にはそれはムラユの新集落であった。まだ掘削中の水路は川から 500m の長さが完成していて、そこに、ブギスのそれと全く同じように、点々と家が建てられていた。これはパリット・スコマジュ (Parit Sukomaju) といひ、ムアラトランの南にあるカラナンヤール (Karang Anyar) の15家族が入植用に掘ったものであった。このクパラ・パリットによると、この15戸は全て元のドゥスンでは土地無し農民であった。それがパッシラに申請して、この土地の用益権を得たのである。許可条件によると、水路はムシ川岸から延長 3 km までなら伸ばしてよいということになっているという。元村で土地持ち達はふつうは3年、長くとも5年連作するとそこを放棄して他に移るといふ、いわゆる bush fallow 稲作を行なっている。しかし、ここに来た15戸は土地の制約があって、永年連作を決意しているという。入植後まだ2年しか経っていない現在では15家族は全て、自分達の家を元のドゥスンに保持しており、毎金曜日にはお祈りに帰るといった生活をしているが、ゆくゆくはここに本拠を移すべく、屋敷地の造成はもちろん、村作りに精を出しているという。明らかに古いドゥスンとこの入植地の間には大きな差が生じている。前者は旧来の移動耕作に従うものであり、後者は定着農法に転じてしまっているのである。

パレンバンより上流、すなわち中流域からの移入者も少なくない。スンガイ・スラットジャラン (Sungai Seratjaran) ぞいで出会ったひとはルバック農業の先進地、例の水門を持つプムルタンからの入植者である。このひとはプムルタンで一時クリオをつとめたひとで、元村には12スカット (sekat) すなわち約 4 ha の水田を持っているが、それらの半分は小作に出し、残り半分を自分で作っている。彼は以前スピード・ボートの運転手をしてい

て、海岸低地をよく知っていたが、そのうち、ここにねらいを定めて、ガシン (Gasing) のパッシラに申請して入植の権利を得たのである。⁷⁾ 1976年、80 depo×300 depo (1 depoは両手を広げた長さ) の湿地林を開き、1977年にはその隣の30 depo×200 depoを開いた。今ではもう川ぞいの屋敷地の造成もでき、そこにはココヤシとグアバが植わっている。いよいよ新居と新田は完成したのである。彼は、もうすぐここを自分の定住の地とし、元村の土地と家を息子夫婦にまかせる計画だという。彼によると、少なくとも彼の家族にとって、この計画は当を得たものだという。なぜなら、パサンスルット地区とルバック地区の両方に田を持つことは労働力配分の観点から好都合だからである。新居と元村の間には、スピード・ボートさえあれば2時間で往きつける。このあたりの海岸には、似た

ような入植者の家を数百mおきにみた。いずれも中流域のルバック地区からの入植者達だという。彼らは昔からこのあたりに薪とりに来ておって、事情をよく知っていたのだが、最近、自分達の元村の農地不足が著しくなってきたので、新たな土地を求めてやってきたのだという。⁸⁾ この元クリオの入植の経緯からすると、ブギスの影響というものはそれほど感じられない。むしろ、パレンバン周辺のルバック先進地区から溢れ出てくる人達の自然な開拓前線という感じがする。

いずれにしても、海岸低地は、かつての点としての占居から面の空間へ拡散しつつある。それは同時に、休閒農法から永年連作への質的な変容でもある。おそらく、近い将来、海岸低地は西マレーシアの海岸平野のように一大米作地帯に変わってゆくのではなかろうか。

あ と が き

私はこの小論を書いている間、しばしば Marsden の *The History of Sumatra* (1811) を想い出していた。19世紀初頭、スマトラ西海岸を旅行した彼は、当時、焼畑に替って拡がり始めていた水田をみて、農民に水稻と陸稲の比較を行わせている。(p. 66-67) 農民がいうには、陸稲のほうがはるかに勝っている。第1に、それはより美味である。第2に、水気が少なくて保存によい。それに何よりも、あんな沼地で働くなんて人間として為すべき行為ではないというのである。彼らにとって稲といえば、本来、焼畑できちんと作る物であったはずなのだ。しかし、植民地経済が浸透し、コショウやコーヒーを中心とした商品

作物の導入とそこで働く労働者群が生れてくると、旧来の格式のある米にとって替るようにして、もう一つの米が出現してくる。不味だけれども腹の足しにはなる、主として労働者用の米である。当時、おそらく明瞭に2種の米が意識し出されていたのであろう。少ししかとれないが良質の陸稲と、多収ではあるが下賤な水稻と。ちょうど世界の食糧不足が論じられた1960年代、東南アジアの人々が自らの飯米には伝統品種を、しかし、売却用には不味な IR 品種を作ったと同じように。

ラナウ湖をはじめとする上流山地部の水田が、どういう経緯で発生し、今日の姿に至っ

7) 特に6人乗りの平底のスピード・ボートは乗り合いタクシーとして極めて普及している。パレンバンにはこうしたスピード・ボートが何百艘と客待ちしている。数十kmの先の集落にも、これでいとも気軽にとばす。

8) Budiano, J. 1975. *Agricultural Production System. South Sumatra*, pp. 2, 5 によると、ルバック地区においては、すでに農地の平均持有面積は1ha/戸になっている。一方、パサンスルット地区では、今だに、それは大略2.5ha/戸といった余裕がある。

たかは、今の所、実際には不明である。しかし、Marsden の描写は、それがここで起きたとしても決して不自然とは思えない。ラナウの人達は最初は飯米を斜面で、そして売却用の米を低湿地で作ったのだろう。しかし、やがて例えばコショウをそしてのちにはコーヒーを彼らが本来陸稲を植えねばならない斜面にも植えるようになったのではなかろうか。結果は斜面の一等地を追い出された稲は、仕方無く低湿な沼地に追い出されざるをえないことになる。

中流部でも似たようなことが起きたと考えることができそうである。台地や自然堤防など高みの焼畑が放棄されるのはラスアンでは今から40年前だというし、シラプラウパダンでは1920年以後という。これは、ちょうど、このコムリン中流域にゴムが導入される時期に近い。このころ、この地域はパレンバンに強く結びつけられてゆくのではなかろうか。自然堤防上の bush fallow の果樹園化、湿地林の水田化というこの地域の景観の大転換はこの時期に急激に起るのである。

第3波は、たかだか6～7年前に始まり出した海岸低地へのパサンスルット稲作の導入

である。これは、リアウ経由でここに到来したブギスによって現在進められつつあるものである。前章でも述べたごとく、ブギスはリアウから移動性の潮汐灌漑稲作を習得した。しかし、このスマトラの地ではひっきょう、客人でしかありえない彼らは、許された利用面積の限定から、移動農耕というぜいたくを許されず、やむなく定着潮汐灌漑稲作という新技法を作り出してゆくのである。海岸低地における、こうした定着稲作の発生は、スマトラ側からみる時、ある意味では予期しないハプニングでさえあるのである。今までほとんど無人に近い焼畑空間に、ある日突然定着稲作が拡がってゆく。

第1次、第2次の場合と同様、ここでも変容は外部からのインパクトで急速に進められてゆくのである。あるいはこうした形の外部からの影響で突然的に起る生産形態の変化というのはスマトラだけのものではなく広く島嶼部全体の特徴なのであろうか。大陸部の比較的連続的な発展のみをみてきた私には、この歴史の不連続性は極めて特異なものに映じるのである。